

兵庫県東播磨地域における 特定外来生物ナガエツルノゲイトウ駆除活動について

中村聡美

(いなみ野ため池ミュージアム運営協議会 ため池・地域づくりコーディネーター)

1. 概要

兵庫県東播磨地域では、希少種アサザの生育するため池で、2018年に特定外来生物ナガエツルノゲイトウが初めて発見された。その後も相次いでため池や河川等から発見され、現在まで2年半にわたり、専門家・行政・ため池管理者、地域住民による駆除作業を継続して実施している。

ナガエツルノゲイトウは、南アメリカ原産の外来植物で、節から根や芽が出て、増殖する。水面をマット状に横に広がる茎は、長さ1mを超えることもある。ストローのように茎が中空で、水に浮いて拡散する。水田に侵入すると農業被害を引き起こす恐れがあり、河川やため池から水田や水路に入れぬ対策と根絶を目指した活動を行っている。



図 1. 水辺に広がる様子



図 2. 節から根と芽が出る



図 3. 茎は中空

2. ため池エコミュージアム「いなみ野ため池ミュージアム」

東播磨地域では2002年からため池を展示物とするいなみ野ため池ミュージアムが展開され、ため池の保全活動が行われている。ため池管理者だけでなく、行政・地域住民・企業・学校・専門家・活動団体等、様々な立場の人がため池の活動に関わっている。

特に、ため池は夏季に多様な水草が生育する場でもあるため、アサザ祭りやオニバス観察会など、水草を中心としたイベントも継続的に実施している。イベントでは、ため池管理者と行政、専門家が協力して取り組んできた。



図 4. アサザ祭りの様子

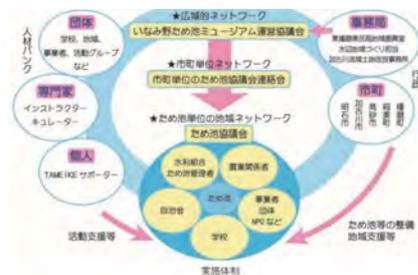


図 5. いなみ野ため池ミュージアムの組織図

3. 特定外来生物ナガエツルノゲイトウの発見の経緯と駆除活動の体制

東播磨におけるナガエツルノゲイトウは、アサザ祭りをきっかけに発見された。その後の調査で、上流にある新仏池、下流の新川池、ため池の水系をつなぐ喜瀬川内で多数の群落が発見された。その後、天満大池の駆除作業の際に専門家のレクチャーを受けた行政職員や、ため池調査を実施していた専門家などが複数の水系で発見した。発見したナガエツルノゲイトウの情報は、いなみ野ため池協議会の連絡体制を中心として、集約・共有された。

効果的な駆除活動を実施するには、関係各所の連携が必要である。いなみ野ため池ミュージアムの活動を通して、主な関係者同士の交流があったことで、当初からスムーズな連携が取れたことが駆除体制の確立に有効だったと考える。駆除費用についても、行政のため池保全のための補助金を活用することで、早期に駆除作業を開始することができた。また、定期的に開催される対策会議においては、専門家やため池管理者、行政関係者などによる活発な議論が毎回交わされ、常に効果的な駆除方法の検討ができる体制になっている。



図 6. 手作業で芽と根を駆除する様子



図 7. 遮光シートを設置する様子

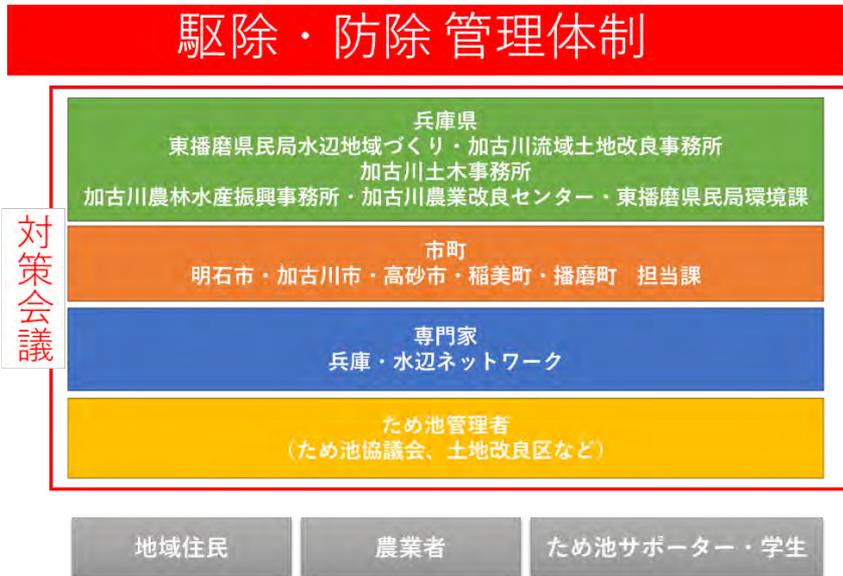


図 8. 駆除・防除管理体制

ため池に関わる多様な主体が集まって議論している

4. 不可解な分布のナガエツルノゲイトウ

ナガエツルノゲイトウの茎は中空で水に浮き、流れ着いた場所で出根・出芽し、定着する。同一水系では漂着により分布が拡大する可能性はあるが、水系が接続していなければ流入しないはずである。

複数の水系で確認している現状を踏まえ、人為的に分布が広がっている可能性も視野に入れ、今後は、駆除だけでなく啓発活動に力を入れていかなければならないと考えている。



図9. 東播磨地域と近隣でナガエツルノゲイトウが確認された地点 (2021年2月11日時点)